『本朝小序集』研究覚書（付・翻刻）

本間洋一

『本朝小序集』（題簽なし。菊亭文庫蔵〈菊・ホ・16〉寛文七年〈一六六七〉冷泉為清書写）は、別に「和歌真字序」とも呼ばれ、「真字の和歌序五十三編を収める」（『日本古典文学大辞典』第五巻、岩波書店）とされているが、実はこれは正確な記述ではない。それは末尾に対策文（「詳和歌」）や「人麿画讃并序」が収められているからか、と言えばそうではない。勿論両篇とも「和歌序」の枠を外れるのだが、今は和歌に関わるものとみなして許容しても良い。問題は次の四作である。

先ず六番目の令明作の題詞に「七言暮春於二城南別業一同賦二仙家春未レ尽詩一首　題中取レ韻付二小序一」とある。傍点を付した四ケ所に注目すれば、此作が「和歌序」ではなく「詩序」であることは明白である。即ち「七言」「題中取韻」は詩序にこそ必要ではあれ、和歌序には無用の文言である。また、「賦二――一」も詩序に用いられる文字であって、和歌序では「詠二――一」と記されるべきものである。

次に二十八番。この匡衡の作は後述するように「和歌序」ではなく、明らかに「詩序」で、『江吏部集』（巻中）では七絶を伴うものなのである。

また更に、四十三・四十四番の憶良の二作も敢て言えば「詩序」であって、所収作の末尾には共に七言四句詩が、まるで序の続きでもあるかのように記されているのが注意される。

こうしたことも含め、分類上の不備を論うのは容易であるが、もともと手控え程度のものに過ぎず、未定稿に終ったものかと稿者などは臆測しているので、殊更に厳密さを要求するのも詮

ないことかと思う。

本書と性格の類似するものに『扶桑古文集』[1]がある。それには前掲の令明の詩序が収められ、且つ和歌序についても四篇が共通して収められている。従って本書と何らかの関係――例えば本書書写時の資料の一つ、或は同じ資料をもとにしていたというような――があるはずであるが猶未詳である。本書の奥書（後掲翻刻参照）に依れば、本書書写当時に「和歌序六巻」と、「和歌序等」の外題を有する一巻が存していたことが知られる。本書がその後掲一巻なのか、或はそれらをもとに成った抄出本なのか、今一つ判然としない。が、いずれにしても、書名「本朝小序集」は本書書写当時以前に遡ることはないと考える。そしてその名称も、「和歌真字序集」というよりはまずはふさわしいもののように思われるのである。以下各作品について若干の覚書を認めておきたい。

1　（作者）**藤原行成**（九七二―一〇二七）（他出）**本朝文集（巻四五）**

行成は義孝の子、伊尹の孫。三蹟の一人で正二位権大納言に至った。彼が「参議正三位行右大弁兼侍従」であったのは、長保五年（一〇〇三）十一月五日より寛弘二年（一〇〇五）六月十八日迄のこととなるが、「美濃権守」とあるのは不審。恐らくは「美作権守」（寛弘元年正月廿四日兼任）の誤りかと考えられるので、本和歌序は寛弘元年（長保六年七月に改元）の冬に作られたことになる。すると注目されるのは次の二条の記事である。

「参内、内府被㆓羹次㆒、淵酔之餘有㆓和歌之興㆒、余奉㆑勅序、入㆑夜退出」（『権記』寛弘元年十月十七日）

「従㆓内大臣御許㆒、右頭中将（実成）来云、今日可㆑奉㆓仕羹次㆒、若可㆑参否者、従㆓兼依可㆑参、即参入、事有様如㆓先日㆒、有㆓御楽事㆒、有㆓和歌㆒、賜㆓上達部御衣、殿上人疋見（絹）㆒、事了還出」（『御堂関白記』寛弘元年十月十六日）

これに依り、内大臣公季の羹次に奉仕した折に和歌会があり、行成（当時三十三歳）が序文を作したことが知られる。更に、後の『八雲御抄』（第二作法部）に、

「宸遊　寛弘元年十月密宴、参議右大弁行成書㆑之、（于㆑時公任斉信俊賢有国輔正忠輔）」

とあるのもこの時の事と推定される。

序冒頭の「長保寛弘之間、四海静謐、天下無事」には、匡衡の「長保寛弘之政、擬㆓延喜天暦㆒」（『長保寛弘之間天下幸甚、老儒不㆑堪㆓欣感㆒聊述㆓所懐㆒」『江吏部集』巻中）という同じ時代認識も喚起され、後の藤原明衡（「申㆓一階㆒状」『続文粋』巻

六）や大江匡房（『続本朝往生伝』）によって、文華の興隆と人材の輩出において理想的な御代であったと回顧される一条帝世讃美とも関わりがあろうか。

2　（作者）**大江匡房**（一〇四一―一一一一）

（他出）**本朝文集（巻五二）**

匡房は成衡の子、挙周の孫。権中納言・大宰権帥をへて大蔵卿で薨ず。彼が「左中弁」であったのは、永保元年（一〇八一）八月より応徳元年（一〇八四。永保四年二月改元）六月迄のことであるから、永保二～四年のいずれかの年になる。そこで序文冒頭の「建寅之月、甲子之朝」（「正月甲子の日の朝」の意）に注目すると、前掲三ケ年のうち、正月に甲子の日があるのは永保四年（正月二十四日）のみで、この時の作かと考えられることになる。

3　（作者）**藤原有俊**（一〇三七―一一〇三）

（他出）**本朝文集（巻五〇）**

有俊は文章博士・式部大輔実綱の子、資業の孫。天喜四年（一〇五四）穀倉院学問料を給せられ、康平二年（一〇五九。当時は学生蔭孫正六位上）に、匡房・行家献策の後欠員となった文章得業生に推されている（『朝野群載』巻一三）。そして、同四年十一月には（当時は文章得業生正六位上行丹後掾）献策を控え、敦基を文章得業生に推す奏状（『朝野群載』巻一三）に名を列ね、同七年九月には本書所収「翫菊和歌序」（12番）を記して「左衛門少尉」の職に在ったことが知られる。本序の職名に「蔵人左衛門少尉」とあるので同じ頃と予想されるが、本文の初めに「節当二梅夏之有閏一」とあるのに注目すれば、更に閏五月と判明。有俊の生涯で、閏五月が存在するのは寛徳二年（一〇四五）と康平七年（一〇六四）のみであるから、康平七年閏五月作ということになる（即ち12番と同年の作である）。

4　（作者）**藤原実兼**（一〇八五―一一三）

（他出）**扶桑古文集・本朝文集（巻五一）**

実兼は大学頭季綱二男、信西（藤原通憲）の父。「頗有二才智一」り、「才芸超二年歯一」ゆと称されるも、天永三年四月三日二十八歳で夭逝（当時一蔵蔵人）してしまった（『殿暦』は殺害説も記す）。康和五年（一一〇三）十二月に東宮昇殿（当時文章生）、天仁元年（一一〇八）十二月蔵人となった（以上『中右記』）。「賀州司馬」の職名は文章生外国に依る加賀掾任官を指すと思われ、本作は蔵人任官以前の康和末年か、長治（一一〇四―五）嘉承（一一〇六―七）年間頃の作ではないかと考えられる。

〈校異〉青囲、――青衛（扶桑）　和、歌題目――倭、歌題目（扶桑）

5　（作者）藤原宗兼（他出）扶桑古文集・本朝文集（巻五五）

宗兼については同時代の二人物が浮上する。即ち、近江守隆宗（一〇四五―一一〇三）の息で、少納言・修理大夫・従四位上に至り、永治元年（一一四一）に出家した『千載集』歌人。それから、文章博士・大学頭敦宗（一〇四一―一一一）の息で、文章生出身、穀倉院学問料を給付（康和元年〈一〇九九〉）され、院・東宮の蔵人をへて近江守・和泉守をつとめ正五位下に至った人物である。この二人について、後藤昭雄氏は、『中右記部類紙背漢詩集』（巻五、七、十）や『和漢兼作集』（巻四）の詩句の作者を前者に、『続千字文』の末尾に見える「泉州史藤原宗兼」を後者に比定しておられる。[2] 本序はいずれの人物か明確にし難いが前者か。題中の鳥羽院は離宮の鳥羽殿で、白河天皇退位後にその後院として応徳三年（一〇八六）に献じられたことに始まる。私家集[3]にほぼ同題が見えるが作時は異なるようだ。

〈校異〉和歌――和歌一首并序（扶桑）　藤宗兼――藤原宗兼（扶桑）　之翅――之翅者、歟（扶桑）　請任――請課（扶桑）　詞云――詞曰（扶桑）

6　（作者）藤原令明（一〇七四―一四三）（他出）扶桑古文集

令明は式部大輔・文章博士敦基の子、文章博士茂明の同母兄。令明が「文章得業生」になったのは康和四年（一一〇二）十二月廿八日のことで、長治三年（一一〇六）一月十九日には献策する（『中右記』）から、本序の作時は康和五年～長治二年のいずれかの三月の作ということになる。

〈校異〉文章得業生、――文章得業士、（扶桑）　藤原金令明――藤原令明（扶桑）　時暮――将暮（扶桑）　早遷歟――早遷者、歟（扶桑）

7　（作者）藤原明衡（27番参照）（他出）本朝文集（巻四八）作時未詳

8　（作者）黒主玄孫赤丸（藤原実兼。4番参照）（他出）扶桑古文集・本朝文集（巻五一）

末尾に記される通り長治二年（一一〇五）三月四日の作。実兼は当時二十一歳（文章生）。「左監門藤次将」は左衛門佐藤原某で、「青囲」（囲は闈にも作る）は青宮に同じく東宮を表わす。ここでは、当時「正五位上左少弁左衛門権佐春宮大進播磨介」であった藤原顕隆（一〇七二―一二九）を指すのではあるまいか。

〈校異〉青囲――青囲の左に「宮名」と小書（扶桑）　赤

丸――赤丸上実無作（扶桑）　柿本――柿下（扶桑）
寸陰――寸陰（扶桑）

9　（作者）藤原敦基（一〇四六―一一〇六）

（他出）扶桑古文集・本朝文集（巻五一）

敦基は、文章博士・大学頭明衡の子で、式部大輔・右京大夫敦光（一〇六三―一一四四）の兄。作時は『扶桑古文集』の本文冒頭に「寛治元年」（一〇八七）と付記されているのに従う。但し、本書が敦基を「左京権大夫」としているのは誤りで、『中右記』や『朝野群載』（巻五・朝儀下・蔵人所・補御所人事）で検しても「右京権大夫」とあるのが正しい。文中の「大王」は親王を指す。後三条院第三皇子の輔仁（一〇七三―一一一九）であろうか。白河帝（輔仁の異母兄）と不仲であった為、東宮実仁（後三条院第二皇子）薨去後も彼は皇太子になれず、白河帝は後三条院の遺言に背いて、応徳三年（一〇八六）十一月自分の第二皇子善仁を皇太子に立て即日譲位した。本作はそうした年の明けた二月末頃の作か。

〈校異〉左京権――右京権（扶桑）　富春風――留春風（扶桑）　陵雲之――凌雲之（扶桑）　平砂為岩之頌――平沙為巌之頌（扶桑）　三千年之寿――三千年之春（扶桑）　将慣――慣（扶桑）

10　（作者）菅原在良（一〇四一―一一三）

（他出）扶桑古文集・本朝文集（巻五四）

在良は大学頭定義の子、上総介孝標の孫。『扶桑古文集』に依ると「学生菅原在良」と記される。彼が何時大学に入学したかは未詳。康平四年（一〇六一）三月の「賦曲江花勧酔詩」（『中右記部類巻第十紙背漢詩』）、その前年の「春日世尊寺即事」（同上）にも身分を徴するものが見えない（或は大学学生か）。承保元年（一〇七四）十一月に対策（『除目大成抄』）する以前は文章得業生であった（『卅五文集』「秋夜於源亜将文亭詠終夜聞虫和歌一首」）が、それに補せられた時期もわからない。延久（一〇六九―七三）を遡り、治暦年間（一〇六五―八）末に遡る可能性もあり、更に文章生挙による得業生とすると文章生としての歳月も加味されねばならないので、全くの臆測に過ぎないが、治暦年間初めには文章生で、学生であったのは治暦初年以前（在良二十代中頃以前？）ではあるまいか。猶、文中の「李部大王」（式部卿宮）については、福井迪子氏が敦賢親王（一〇三九―一〇七七）を充てておられる。[4] 福井氏が指摘されるように、題「臨暁聞鹿」はその序文の内容に徴しても、「臨暁聞虫」

が正しい。そして『在良朝臣集』（一六）にも、「秋夜陪二吏部大王文亭一詠二臨レ暁聞ヲ虫一」と題し、「かたしきのねざめのとこのむしのねはあはれ身にしむものにそありける」の当日の和歌が収められている。

〈校異〉李部大王――吏部大王（扶桑）　臨暁聞鹿――臨暁聞虫（扶桑）　菅在良――学生菅原在良（扶桑）　陪松容――侍松容（扶桑）　詠和歌――詠倭言（扶桑）　其時也――時也（扶桑）　疑織――頻織（扶桑）　難禁之也――難禁者也（扶桑）

11　（作者）**藤原広業**（九七六―一〇一八）（他出）**本朝文集（巻四五）**

広業は参議・勘解由長官有国の子、日野三位資業の兄、文章博士・式部権大輔家経の父。冒頭に記されるように、作時は寛仁五年（一〇二一）正月三日。『小右記』（治安元年正月四日条）の次の記事（波線部）と関わるものと考えられる。

「昨日左金吾頼宗已下卿相会二左大将教通許一、大納言公任出居、盃酒数巡後参内、先レ是中宮大夫斉信権大納言行成参入、主上拝二覲母后一、亦皇太子同覲、事訖関白諸卿参二皇太后宮一、酒酣和歌、有二纏□□一。」

猶、序中の「長秋宮」とは、皇太后宮妍子を指す。広業は当時正四位上参議式部大輔で四十五歳であった。

12　（作者）**藤原有俊**（3番参照）（他出）**本朝文集（巻五〇）**

冒頭に記される通り康平七年（一〇六四）九月某日（下旬か）の作。「長秋之宮囲」とあるのは、後冷泉皇后藤原寛子（頼通女。永承五年十二月入内し女御）の居宅を指すであろう。

13　（作者）**菅原在良**（10番参照）（他出）**本朝文集（巻五四）**

冒頭に記す通り承保二年（一〇七五）正月七日の作。前年十一月に対策（10番参照）して及第。この序を作した後の一月中には式部少丞（『除目大成抄』）に任ぜられている。「野宮」（紫野院とも呼ばれる）は、ここでは賀茂斎院が卜定され、一年間潔斎の為にこもる仮宮のこと。承保元年に斎子女王（小一条院五女）が卜定されこもっておられる頃のことと思われる。

14　（作者）**尚書某**（他出）**含英集抜萃・本朝文集（巻三九）**

文中に「貞元元年（九七六）冬十月庚申夜」と見えるのが作時で、庚申は十月二十七日になる。「野宮」「伊州公主」とあるので、斎宮規子内親王（天延二年〈九七五〉卜定。貞元元年九月二十一日野宮に入る）の斎室での作。ところで、『源順集』に依れば順によって仮名の和歌序（当日の題は「松声入二夜琴一」）で、李嶠「風」詩中の句）が作られており、他に斎宮女御や平

兼盛らの和歌も知られているが、「翫二初雪一」題のことは未詳。『本朝文集』は作者を菅原資忠（九三六―九八七。当時は勘解由次官か内記職に在ったか）に当てるが、「尚書」の表記からすれば気になるところ。「尚書」を弁官として探れば、権左中弁（東宮学士・文章博士）菅原輔正（九三五―一〇〇九）あたりの方がふさわしいか（猶未詳）。

〈校異〉書室也――斎室也（含英）　和漢之風詞――和歌之風詞（含英）　幽賛――出賛（含英）　釣於――釣出（含英）

15　（作者）藤原実光（一〇六九―一一四七）

（他出）本朝文集（巻五九）

実光は右中弁有信の子で、弟に宗光、子に日野民部卿資長がおり、権中納言に至った。作時を小書されているように永久三年（一一一五）六月二十七日と考えて良いとすれば、『殿暦』に「今日内府於二東三条一、有二作文和歌事一云々、余（忠実）不レ向、上達殿上有二其数一云々」と見える会に照応。文中の「内相府」は内大臣藤原忠通（当時十九歳。この正月二十九日に権中納言から権大納言へ、四月には更に内大臣となった）。作者実光は当時四十七歳で正五位下右少弁（他に防鴨河使・左衛門権佐も兼務）で、左少弁に転じたのはこの会の後の八月十三日のこと。

16・17　共に作者作時未詳

18　（作者）藤原兼衡（？―一〇六一―一一〇八―？）

（他出）本朝文集（巻五〇）

兼衡は粟田左大臣在衡の子孫で、筑前守為道の子。従四位下・大内記・式部少輔となった。『中右記部類紙背漢詩』の「曲江花初醉」詩（康平四年〈一〇六一〉）や「菊花為二上薬一」詩（承暦三年〈一〇七九〉）の頃はまだ学生で、康和元年（一〇九九）には既に大内記である。「阿波権守」であった時期は未詳。但し、本文中に「左金吾源納言」とあるのに依れば、左衛門督の源氏にして納言職に在る者ということになり、少し広めにとっても次の三者に絞れるかと思う。

源師忠　承暦四年（一〇八〇）八月――応徳三年（一〇八六）十一月
源家賢　寛治五年（一〇九一）正月――嘉保二年（一〇九五）八月
源雅俊　康和二年（一一〇〇）七月――天永二年（一一一）正月

最も可能性の高いのは雅俊か。

19　（作者）藤原敦光（一〇六三―一一四四）

（他出）柿本影供記・古今著聞集（巻五・和歌第六「修理大夫顕季六条東の洞院にて人麿影供を行ふ事」）・

本朝文集（巻五六）

敦光は文章博士明衡の子で、敦基の弟。文章博士・式部大輔・右京大夫などの職に就いた。本書は作時を小書で「元永六—」と記すが「元永元年」（一二〇八）の誤りで、その六月十六日の作。題中の「三品将作大匠」は正三位修理大夫であった藤原顕季（一〇五五—一二三）で、彼の行った名高い人麿影供の時の和歌序である（同時の敦光「人麿画讃」は53番参照）。

〈校異〉倭歌為本——和歌為本（影供・著聞）　凝詞露——疑詞露（影供）　草虫之逸興——艸虫之逸韻（影供）　香衫細男——香衫細馬（影供・著聞）　亦是一揆——只是一揆（影供・著聞）　波烟漸暗——渚煙漸暗（影供・著聞）　松標動——杉標動（影供・著聞）　聊以詠歌——聊而詠吟（影供・著聞）

20　（作者）**菅原在良**（10番参照）（他出）**本朝文集（巻五四）**

在良が「式部少丞」になったのは承保二年（一〇七五）正月。そして、式部少輔に進んだのが承暦元年（一〇七七）閏十二月のことであるから、本序は承保二～四年のいずれかの夏の作（福井迪子氏は二年頃のことかとする）。文中の「右武衛将軍」は右兵衛佐のこと。『水左記』あたりには藤原長兼（承暦元年九月二十三日条に「前兵衛佐」）。同長忠（同年十二月一日条に「右兵衛佐」現任）の名が見えるも未詳。猶、承保三年十一月十四日に、在良は前右衛門佐源経仲家歌合に出席（「式部丞」と記す）していることがわかっている。

21　（作者）**藤原兼衡**（18番参照）（他出）**本朝文集（巻五〇）**

兼衡の作時の身分が記されず、他に作時を詮索する材料がない。「下州前刺史」は前に下野（或は下総）守であった者だが未詳。猶、同時代の歌題として、「凌露尋花」は『経衡集』（七三番）に、「田家秋風」は『後拾遺集』（三六九番・源頼家）『金葉集』（一七三番・源経信）などに見える（瞿麦会編『平安和歌歌題索引』一九八六年）。頼家・経信の作は共に源師賢（一〇三五—一〇八二）の梅津の山荘での作と知られる点は注目されるが、本序との関係未詳。

22　（作者）**藤原親長**（?—一〇七五—一〇九六—?）

親長は、承保二年（一〇七五）八月に擬文章生試を受け、翌年二月の釈奠の「比二徳於玉一」詩序作者である「文章生藤親長」、『中右記部類巻七紙背漢詩』所収の嘉保三年（一〇九六）「落花浮二酒盃一」詩群に見える「宮内少丞藤原親長」と同一人物で、恐らく従五位上出羽守明通の子、有忠（?—一一〇二）の弟に当たる

者（弾正忠）と思われ、『詩序集』にも作品を残している。[5] 文中の「源亜将」は近衛少将（或は、中将）源某で、或は「秋夜於二源亜将文亭一詠二終夜聞一虫和歌」（文章得業生菅原在良。『三十五文集』）と見えるのに同一人物か。とすれば、源隆綱・師忠・俊明・雅実・家賢・俊実らの名も挙げられるが未詳。

23　（作者）**藤原敦基**（9番参照）（他出）**本朝文集（巻五一）**

敦基が「少内記」であったのは、「延久三　式部大丞藤敦基〈本少内記課試労〉」（『除目大成抄』巻八）に依って延久三年（一〇七一）以前であることは疑えない。大曽根章介博士に依れば「少外記敦基」（『帥記』治暦四年〈一〇六八〉十月二日条）とは課試及第による任官という。[6] するとこの足掛四年間に「少外記→少内記→式部大丞」を歴したことになる（少外記を少内記の誤写とは今は考えない）。更にやや絞って冬の庚申の日であることをふまえると、延久元年の十月二十七日と十一月二十八日、翌二年の十月三日と十二月四日あたりのいずれかの日の作ではなかろうか。

24　（作者）**藤原兼衡**（18番参照）（他出）**本朝文集（巻五〇）**

冒頭に記されるように、嘉保二年（一〇九五）三月六日、双輪寺における法華経会の後に催された和歌会の序。「経二行林中一」の題は『法華経』序品に「経二行林中一、勤二求仏道一」とあるに依る。猶、この題は、更に後の永久四年（一一一六）十月に六波羅蜜寺で行われた勧学会の詩題にもなっている。文中の「門下録事」は大外記か少外記、「尚書都事」は大史を指す。『中右記』を参考に候補を拾ってみると、清原定俊（大外記）・大江通景（少外記）・惟宗広忠（同上）・小槻祐俊（大夫史）・惟宗盛忠（右大史）・中原成俊（右大史）らの名を挙げられるが猶未詳。

25　（作者）**藤原明衡**（27番参照）？　（他出）**本朝文集（巻四八）作時未詳**

26　（作者）**藤原行家**（一〇三九―一〇八〇）　（他出）**本朝文集（巻五四）**

行家は、文章博士・式部大輔を経て参議となった広業の孫、文章博士や式部権大輔をつとめた家経の子で、右大弁正家の弟である。彼の若年の頃の履歴はよくわからないが、康平四年（一〇六一）三月三日の藤原明衡邸「曲江花勧二酔一」詩会では「前文章得業生」（『中右記部類巻十紙背漢詩集』）とあり、『尊卑分脈』に依れば、前年四月に対策している由である。更に早くは、天喜二年（一〇五四）十一月に勧学院学問料を申請（当時蔭子正六位上。『朝野群載』巻一三）しているのも知られる。本序に記

される「学生」は、文章得業生や文章生になる以前のことであろう。また、冒頭の「五年秋八月」とあるのも勘案すれば、永承五年（一〇五〇）の作ではあるまいか。

27　（作者）**藤原明衡**（九八九？―一〇六六）

（他出）**本朝文集（巻四八）**

明衡は、山城守敦信の子。子に敦基・敦光がいる。『本朝文集』の題は「答二送レ行作一序」。冒頭に「予従二春宮一乎拝二雲州一」とあるのが作時推定の手掛となるか。彼は永承四～五年（一〇四九～一〇五〇）頃に「正五位下出雲守」であった。(7) 当時の春宮は尊仁親王（寛徳二年〈一〇四五〉正月皇太子。治暦四年〈一〇六八〉受禅。後三条天皇）で、その蔵人から出雲守になった頃だから、先の永承四年かそれを少し遡る時期の作と言えようか。猶、文中の「加賀員外刺史」即ち加賀権守なる人物名未詳（擬作の類ではないとして）。

28　（作者）**大江匡衡**（九五二―一〇一二）

（他出）**江吏部集（巻中）・本朝文集（巻四三）**

匡衡は、中納言維時の孫、右京大夫重光の子。妻赤染衛門との間に文章博士や式部大輔をつとめた挙周がいる。文冒頭に、正月尾張守となり（『続文粋』巻六所収の大治五年正月付の敦光「申二紀伊守一状」にも記さる）、三月には文章博士となったと記すが、通説に従えば寛弘六年（一〇〇九）のこととされる。(8) 但し、『文粋』（巻六所収の「申二美濃守一状」寛弘六年正月十五日付）に既に「正四位下式部権大輔兼文章博士」と見え齟齬するのが気になる。猶、文中の「賀州源刺史」は加賀守源兼澄、「青宮菅学士」は東宮学士菅原宣義であろう。

〈校異〉聖主――聖上（江吏）

29　（作者）**藤原後生**（九〇九―九七〇）

（他出）**本朝文集（巻三六）**

後生は、式部大輔や文章博士となった文貞の子で、文章博士弘道の父。『扶桑集』や『本朝文粋』に名を列ねる文人。『大日本史料』では本作を康保二年（九六五）十二月九日のこととして掲載する。村上天皇四十算賀の和歌詠は、同十二月四日に行われ、その時の序文も後生の作（「奉レ賀二村上天皇四十御算一和歌序」『文粋』巻十一）。本作は「興福寺賀二天皇四十御算一」（『日本紀略』十二月九日条）の記事と関わり、「天暦の帝四十になりおはしましける時、山階寺に金泥の寿命経四十巻をかき供養し奉りて、御巻数鶴にくはせて洲浜にたてたりけり」（『拾遺集』巻五・賀）などとして、兼盛と仲算の和歌を載せているのもこの時のものとされている。

30　（作者）**藤原斉信**（九六七―一〇三五）（他出）**本朝文集（巻四五）**

斉信は、太政大臣為光の子、大納言に至る。後掲の和歌は『拾遺集』（巻十八・雑賀・一二七四）に収められ、「東三条院の賀左大臣のし侍りけるに、上達部かはらけ取りてうた詠み侍りけるに[9]右衛門督公任」とあるように公任歌。東三条院・女院とは皇太后詮子（九六二―一〇〇一。正暦二年〈九九一〉九月出家）のこと。詮子四十賀は長保三年（一〇〇一）十月九日に上東門邸でも行われるが、本作はこれに先立つ「左大臣奉レ賀二東三条院四十算一、始修二法華八講一、侍臣奏レ舞」（『日本紀略』長保三年九月十四日条）の記事と関わるものと考えられる。また、本文中に「五六、宝算」とあるのは「五八、宝算」の誤りと思われる。

31　（作者）**源時綱**（？―一〇四三―一〇八八―？）（他出）**本朝文集（巻四七）**

時綱は肥後守信忠の子。文章生として弓場殿試を受け（長久四年〈一〇四三〉）、肥後守・筑前守となるも、寛治二年（一〇八八）十一月安房に配流。惟宗孝言や大江佐国と並ぶ文人だが、作時を決定できる証拠がない。

32　（作者）**高階公俊**（一〇三四―一〇九七）（他出）**本朝文集（巻四七）**

公俊については次の『中右記』（承徳元年閏正月十六日条）の卒去記事が要を得ている。

「今朝正四位下行中宮亮高階朝臣公俊卒去〈一昨日出家、年六十四〉。故業敏朝臣之男也。後冷泉院御時為二文章生一、後三条院御時為二蔵人一。従レ爾以来為二故陽明（門）院別当一、頻関加レ階。経二能登一一任二美濃一重任。依レ有レ当レ縁、補二当時中宮亮一也」

作時については冒頭に記されるように治暦二年（一〇六六）三月五日。

33　（作者）**泗水沈老安祐**（未詳）

安祐は僧名のようでもあるが、「泗水沈老」の表記からすると、紀伝道世界に生きる不遇な老人というイメージ。安祐は学生の字か、或は偽名か、猶未詳。

34　（作者）**惟宗孝言**（一〇一五―一〇九七―？）（他出）**本朝文集（巻四七）**

孝言は能登守教親の子。文章生から大学頭・伊賀守などを歴任した。その彼の生涯中、「八年之夏、五月之候」とある冒頭に対応するのは、寛治八年（一〇九四。嘉保元年）、康平八年（一〇六五。治暦元年）、長元八年（一〇三五）しかないが、他に有力な

手掛がないので特定できない。

35　（作者）**藤原有業**（？―一二三）（他出）**本朝文集（巻五四）**

有業は行家の子で、右少弁正五位下で物故。筑前守や長門守の履歴は知られるが「甲斐権守」のこと未詳。文中の「訪二上人寂寞一」は瞻西（？―一二七）を指すと思われるので、大治二年（一二七）以前の作であることは間違いない。

36　（作者）**大江有元**（？―一〇八〇―一二三〇―？）（他出）**本朝文集（巻五五）**

有元は従四位上陸奥守源有宗の子で、大江匡房の養子となり、式部大輔・文章博士などを歴任。文中に「顧二暮齢於潘岳一、既作二二年之兄一」とあるのは、潘岳（二四七―三〇〇）の生涯（五十四歳）を指すのではなく、王朝詩文によく見受けられるように「秋興賦」を意識したものと思われるので、ここでは三十四歳を指すことになろう。有元の生没年は未詳だが、嘉保元年（一〇九四）十二月に秀才の宣旨を受け、承徳二年（一〇九八）には献策したかと思われるので、康和（一〇九九年）・長治（一一〇四）・嘉承（一一〇六年）・天仁（一一〇八年）といった改元の年の作ででもあろうか、猶未詳。

37　（作者）**大江有元**（36番参照）（他出）**本朝文集（巻五五）**

有元は嘉保元年十二月に秀才（文章得業生）になっているので、それ以前に称するとすれば文章生である。そして、承暦四年（一〇八〇）十一月「池水隔レ松見」詩会（『中右記部類巻第五紙背漢詩』）では文章生惟宗仲親の次、学生惟宗広親の二人前に詩が置かれている。掲載順に従えば有元の後は平祐俊であるが、この頃祐俊は文章生であったので、恐らく有元も文章生であった可能性が高い。とすれば、本序のように「学生」であった時期は更に遡ることになる。即ち承暦年間（一〇七七―一〇八〇）以前の作と考えられようか。

38　（作者）**藤原友房**（？―一〇七三―一一〇八―？）（他出）**本朝文集（巻五〇）**

友房は式部大輔国成（或はその兄弟の国長とも）の子で、応徳二年（一〇八五）に肥前守となり（『魚魯愚抄』）、天仁元年（一一〇八）には大和守に任じている（『中右記』）。とすれば、「肥州前吏」に依って寛治四年（一〇九〇）から嘉承二年（一一〇七）の間の作ということになろうか。

39　（作者）**藤原成家**（？―一〇五五―一二〇四年以前に没）（他出）**本朝文集（巻四九）**

成家は中納言懐忠の曽孫、宮内少輔成尹の子で、文章得業生

となっている（『尊卑分脈』では更に「大学頭・信乃守」の職歴を挙げている）。作時は未詳。猶、『本朝文集』では題を「初冬於二広隆寺一翫二紅葉一和歌序」としている。

40　（作者）**菅原在良**（10番参照）　（他出）**本朝文集（巻五四）**

在良「学生」時代ということになるので、10番とほぼ同じ頃の作であろう。

41　（作者）**藤原重経**（生没年未詳）

（他出）**本朝文集（巻四九）**

冒頭に記される通り永保三年（一〇八三）三月十三日の作。重経については『尊卑分脈』に、懐忠（九三五―一〇三〇）の孫懐尹の子「従五位上紀伊守重経」、同じく成尹の子に「従五位下紀伊守成経」（「成」は「重」にも作る）と見えるが、実は同一人物らしく、重尹（九八四―一〇五二）の子であると言う。

42　（作者）**大伴家持**（七一七?―七八五）

（他出）**万葉集（巻一七）・本朝文集（巻九）**

家持は大納言旅人の子、従三位中納言に至る。『本朝文集』所収題は「和二大伴池主上巳遊覧詩一序」。本書が「三月五日大伴宿祢池主」を題の如く記すのは誤り。その記事は『万葉集』で本序の前に置かれる池主書簡文と和歌（三九七三―一五）に続く末尾に他ならない。天平十九年（七四七）三月五日の作。

〈校異〉鄙里小児――鄙里少児（万葉）　擬辞詞矣――擬解咲焉、如今賦言勒韻、同斯雅作之篇、豈殊将石間瓊、唱声遊走曲歟（万葉）

43　（作者）**山上憶良**（六六〇―七三三?）

（他出）**万葉集（巻五）・本朝文集（巻三）**

天平五年（七三三）の作と思われる。已に本稿冒頭で言及した通り敢て言えば「詩序」と称すべきもの。

44　（作者）**山上憶良**（43番参照）

（他出）**万葉集（巻五）・本朝文集（巻三）**

『本朝文集』では題を「挽歌序」（国史大系活字本は歌を詩に改む）とする。本作末尾に「神亀五年七月二十一日」とあるのは、実は『万葉集』で本作の次におかれている「日本挽歌」の後に付された年月日であり、本序の作時かどうか保証の限りではない。

〈校異〉乎方丈――于方丈（万葉）　无結――無結（万葉、但し異体字関係）

45　（作者）**吉田宜**（?―七〇〇―七八―?）

（他出）**万葉集（巻五）・本朝文集（巻六）**

『本朝文集』では題を「寄二某人一啓牘」とする。『万葉集』に依れば天平二年七月十日付の大伴旅人宛の返書で、梅花宴や松浦河に遊んだ時の作を読んだ感想が列ねられ、それに和する歌など四首が添えられている。作者は『懐風藻』にも漢詩二首を残す。初め恵俊と称する僧であったが文武天皇四年に還俗し、吉宜の姓名を賜り医術を業とした。吉田連の姓を賜ったのは神亀元年（七二四）。

〈校異〉伏冀――伏願（万葉）

46　（作者）大伴家持（42番参照）

（他出）万葉集（巻一八）・本朝文集（巻六）

『万葉集』に依り天平感宝元年（七四九）五月十五日の作。本書での書き様は少々変っている。「七出例～疾得之」迄を三行（毎行十六字）で記し、三行目下二字分を空け、改行して「両妻例～夫節婦」を二行に記す（この二行目末尾四字分空きあり）。そして更に、改行（改丁になる）し、二字分落として「謹安件～其詞曰」を四行（毎行十四字）に記すという、本書中ではかなり変則的な体裁になっているのが注意される。

〈校異〉敬喩――教喩（万葉）　尾張少作――尾張少咋
合弃之――合出之（万葉）　疾得之――疾得弃之（万葉）
謹安件――謹案先件（万葉）　義史之――義夫之（万葉）
之志乎哉――之志哉（万葉）　棄悪――弃旧之（万葉）

47　（作者）大伴池主（？―七三八―七五七―？）

（他出）万葉集（巻一八）・本朝文集（巻六）

『万葉集』に依り天平勝宝元年（七四九）十一月十二日の作。池主から家持に宛てた書簡で、後に和歌四首が続く。

〈校異〉国大掾――国掾（万葉）　作栄――作策（万葉）
鴛易――貿易（万葉）　正贓――正贓倍贓（万葉）　令勒――今勒（万葉）　微使――徴使（万葉）　返報――反報（万葉）　貨易――貿易（万葉）　鴛易人――貿易人（万葉）

48　（作者）大伴池主（47番参照）

（他出）万葉集（巻一八）・本朝文集（巻六）

『本朝文集』では題を「再贈二某人一書」とする。天平勝宝元年十二月十五日付の、池主から家持に贈られた二首の和歌の前に記された書簡文。

〈校異〉今月五日――今月十五日（万葉）　来対――来封（万葉）　辞云〇云――辞云々（万葉）　光所奉――先所奉（万葉）　夜疑歟――度疑歟（万葉）　嚩囉――嗎羅

（万葉）　徒室――記室（万葉）

49　（作者）未詳（他出）発心和歌集

選子内親王（九六四―一〇三五）の自撰家集『発心和歌集』の序文。作者については、書陵部本・島原松平文庫本の奥書に「現在書目録之発心集（赤染法文歌、有序、匡衡作云々）」の文言があり、大江匡衡作とも伝えられていることになるが、彼は実は本序に「寛弘九載南呂」とある少し前の七月十六日に没している。生前に已に作られていたとみれなくもないが、とりあえず未詳とする。以下の通りかなり異同が見られる（私家集大成の翻字による）。

〈校異〉載歌詠――歌詠諸（発）　詞苟為仏事矣――功高為仏事焉（発）　然猶――猶（発）　跡風俗名殊――迹風俗殊（発）　詫生――誕生（発）　愛身――受身（発）　桑樺（梓）――桑梓（発）　肥人――飢人（発）　卅八（冊）――卅一（発）　以書其詞――以其詞（発）　泊于――海乎（発）　発心集――発心和歌集（発）　終植――終殖（発）　以営――営（発）　愍誓願――懇誓願（発）　剃鬢髪――剃髪（発）　以入山――入山（発）　経五（王）彰――経生新（発）　耶（那）不知此――耶不知出此（発）　同多宝――□多宝（発）　吹林――吹□（発）　俄令――偸命（発）　臨終――照鑒（発）　手執此集――乎執此時（発）

50　（作者）紀貫成（大江匡房か。2番参照）

（他出）朝野群載（巻一三）・本朝続文粋（巻三）・本朝文集（巻五二）

問者として記される「弾正大弼明賢」は、宇治大納言源隆国の孫、大納言俊明（一〇四四―一二四）の子で、『千載集』に一首入集する歌人。「紀貫成」の正体は実は源明賢であると示していることになるが、『朝野群載』には「江匡房作」と記される（後者に従うべきであろうか）。作時未詳。

〈校異〉詳和歌――評和歌（朝）　○朝――開朝（続文）　其情――其旨（続文）　是聞――欲聞（朝）　何主――何王（朝）　富緒川――富緒河（続文）　柿下――柿本（続文）　学志――志学（朝・続文）　七歩才名――七歩之才名（続文）　莫迷――莫泥（続文）

51　（作者）花園赤恒（大江匡房か）

（他出）朝野群載（巻一三）・本朝続文粋（巻三）・本朝文集（巻五二）

対者の赤恒を「大江広房」として、匡房の作かとも記すが、50番同様匡房の作ではなかろうか。猶、広房は橘以綱の子で文章得業生をへて正五位下信濃守となった。匡房の養子であったが、天永二年（一一一）に本姓に戻っている（『尊卑分脈』）。本文については『群載』や『続文粋』とかなり異同がみられるものの、本書と『続文粋』所収本文はまず近いと言って良いが、『群載』（国史大系本を参看）とは文脈構成がかなり異なる。その違いは錯簡に依り生じたものと思う。

〈校異〉志摩目――信濃少目（朝）　花園朝臣赤恒――花園赤恒（朝）　望仙姫而始――始（朝）　清御原――清三原（朝・続文粋）　訪洛嫒而勿――勿（朝）　五七々――五七々々（朝）　爾矣――爾焉（続文粋）　濃香絶――濃香施（朝・続文粋）　命松客――命松容（続文粋）　諳人――諸人（続文粋）　小蟬鳴――山蟬鳴（朝・続文粋）　滲清冷――添清吟（続文粋）　微波――微波（続文粋）　富緒川――富緒河（続文粋）　混本昔製――混本之昔製（続文粋）　誹諧古辞――誹諧之古辞（続文粋）　注日域――訪日域（続文粋）　草靡――草普靡（続文粋）　天磐――天石（続文粋）　八千代――亦千代（続文粋）　成雲――生雲（続文粋）

52　（作者）藤原基俊（一〇六〇？―一一四二）

（他出）本朝文集（巻五五）

作時は末尾に記されるように嘉承元年（一一〇六）九月十三日。基俊は右大臣俊家の子だが、左衛門佐従五位上に留まり長らく不遇であった。保延四年（一一三八）出家して覚瞬という。

53　（作者）藤原敦光（19番参照）

（他出）朝野群載（巻一）・本朝続文粋（巻一一）・古今著聞集（巻五・和歌第六）・本朝文集（巻五七）

19番と同じ人麿影供の折の作で、『朝野群載』には末尾に「元永元年六月日大学頭藤敦光作」と記されている。

〈校異〉柿下朝臣人麻呂――柿本朝臣人麿（朝）・柿下朝臣人麿（続文粋・著聞）　名人麻呂――名人麿（朝・続文粋・著聞）　為□幽玄――為重幽玄（続文粋）・遂依重幽玄（朝）・依重幽玄（著聞）　聊伝――方伝（朝）　其詞曰――其辞曰（朝）　稟性――受性（朝・著聞）　詞華――詞花（朝）　先賢――前賢（著聞）　無緇――無滓（朝・著聞）

〔注〕

(1)　「和歌真字序集」として重要文化財に指定されている。応保二年（一一六二）三月三日書写の奥書があり、その翻刻（故太田晶一郎氏の手になるか）は『東大史料編纂所報』第二号（昭和四二年）に掲載。猶、和歌序（真字序）についての基本論文に、大曽根章介先生「和歌序小考」（犬養廉編『古典和歌論叢』昭和六三年・明治書院）「和歌序について――本朝小序集と王沢不竭鈔――」（『国史大系月報』四十六号、昭和四一年五月）があり、この二論は『大曽根章介　日本漢文学論集』第一巻（平成十年・汲古書院）に収録されている。

(2)　「『日本詩紀』拾遺（七）」（『大阪大学教養部研究集録（人文社会科学）』第三九輯、一九九一年二月）参照。

(3)　『俊頼集Ⅰ』（私家集大成中古Ⅱ・散木奇歌集〈六九二〉）に「修理大夫顕季のひづめの山里にて松久友といへる心を」と題する一首あり。

(4)　「菅原在良考」（『一条朝文壇の研究』昭和六二年・桜楓社）。

(5)　注(2)所引後藤氏の拾遺を参照。

(6)　「藤原敦基論」（『山岸徳平先生記念論文集　日本文学の視点と諸相』平成三年・汲古書院）。

(7)　大曽根章介先生「藤原明衡の生涯」（『王朝漢文学論攷』一九九四年・岩波書店）。

(8)　大曽根章介先生「大江匡衡――一儒者の生涯――」（『漢文学研究』十号、昭和三七年十月）。

(9)　『公任集』では「女院の四十の賀に大将殿のしたまひける、かはらけとりて」の詞書になっている。

京都大学図書館蔵『本朝小序集』翻刻

本書は菊亭文庫より京都大学附属図書館に寄託された図書である。縦二七・五糎、横一八・二糎の和綴本写本。表紙の色はやや褪せて薄茶に見えるが、折返をみるともとはかすかに赤味を帯びてもいたか。題簽は無く、表紙左上部、天より一・五糎あたりから「本朝小序集」と表紙に直書されており、右上隅には「菊／ホ／16」の小票（縦二・八糎、横一・九糎）が添付されている。楮紙の本文墨付は四十三丁。一丁～六丁が本朝小序集目録、七丁～四十一丁が本文（但し二十三丁ウ・三十二丁ウは白紙）、四十二丁～四十三丁オが奥書（但し「冬日侍宸宴言志……」以下末尾迄は朱書）である。一丁オ右下に「今出河蔵書」の朱文印（四・三糎四方）がある。本文は、半丁九行書、

毎行十六字を原則とし、卦線はない。翻刻要領は次の如し。

一、作品には通し番号を付し、本文の異体字は現行の通行字体に改めた。

二、本文では人名・職名・地名等に朱線が引かれ、部類名や題名の上部に朱で丸印が施されているが、翻刻に当たっては省略した。但し、異同や訂正に関わる朱字書入は〔　〕に依って示した。

三、本文の誤りと考えられる箇所については、先ず翻字本文を掲げ、その右側（　）内に稿者の案文等を記した。また、脱落についても、□で示し、（　）に依り補った。

四、稿者の訓みに依り、原文にはない返り点を補った。

＊翻刻に当たって、御許可賜りました菊亭文庫主様、並びに京都大学附属図書館に衷心より御礼申し上げます。

本朝小序集

目録

1　冬日侍二宸宴一言レ志和歌　藤原朝臣行成

陣座

2　早春子日詠和歌并序　江匡房

殿上

3　夏夜詠三連夜待二郭公一和歌一首并序」(1オ)　左衛門小(少)尉有俊

直廬

4　九日於二左金吾藤次将青囲直廬一詠二秋情在レ菊和歌(各)冬加二小序一　司馬実兼

5　春日於二鳥羽院直廬一詠二松為二久友一和歌　藤宗兼

6　七言暮春於二城南別業一同賦二仙家春未レ尽詩一首(題)紀中紀(歌)レ韻付二小序一

殿上遊覧」(1ウ)

7　詠二落花一　明衡

8　春日於二左監門藤次将青囲直廬一詠二百首和歌一序　黒主玄孫赤丸実兼也

9　春日同詠二花樹久芳一応レ教倭歌一首并序　左(右)京権大夫藤原敦基

（親王家）

10　秋夜陪二李部大王文亭一詠二臨レ暁聞レ鹿(虫)和歌一首付二小序一　菅在良

後宮宴(ママ)

11　早春陪二長秋宮一　藤広業」(2オ)

12　暮秋詠二終日翫レ菊和歌一并序　藤原有俊

内親王家

13　早春子日陪二於野宮一詠レ松和歌一首　前文章得業生

菅在良

14　初冬庚申夜侍二野宮一翫二初雪一　尚書

15　夏日侍二東三条第一同詠二池上鶴一応レ教和歌一首并序

左(右)少弁実光

16　秋遊　(2ウ)

行旅

17　初夏同詠レ待二郭公忍声一和歌　大臣家　作人也

山家

18　五月五日詠二和歌一二首昌蒲(マヲ)　祝　付二小序一　藤原兼衡

19　夏日於二三品将作大匠(水)火閣一同詠二水風晩来一和歌一首并序

元永六(元)—六月十六日　大学頭敦光

20　夏日於二右武衛将軍小坪別第一詠二池水久澄一和歌付二小序一

(3オ)

菅原在良

21　秋日詠二二首和歌一　凌露尋花　田家秋風　兼衡

22　於二源是(垂)将亭一詠二月前擣衣一　親長

23　冬夜守二庚申一　詠二夜聞二松風一和歌　藤敦基

24　暮春於二双輪寺一聴レ講二法華経一詠レ経二行林中一和歌并序

兼衡　(3ウ)

25　極楽和歌序　明衡非二明衡筆一歟不定

仏事

26　秋日於二嵯峨別墅一詠二山家秋雨一和歌一首付レ序　藤原

行家

慶賀

27　贈答　明衡

28　早夏諸客賀二予再兼一翰林一不レ堪二情感一聊一絶(賦一絶)　大

江匡衡

29　仏経供養和歌序　藤後生　(4オ)

30　女院御八講之次和歌序　斉信郷(卿)

山寺

31　暮春於二円融院一詠二落花満レ船和歌付二小序一　源時綱

32　暮春遊二長楽寺一同詠二花満二遠近一和歌小序　散班高

階公俊

33　春日於二行願寺一同詠二見レ花日暮一和歌一首并序　泗水

沈老安祐

34　夏日同詠二松陰避レ暑和歌　宗孝(言)亡　(4ウ)

35 夏日於雲居寺同詠雨中逢友和歌付小序　甲斐権守有業

36 早秋於清水寺西洞詠望月未飽和歌一首序　大江有元

37 九月十三夜於長楽寺詠山家秋月和歌一首加小序　大江有元

38 秋夜宿山寺言志和歌一首付小序　藤友房

39 題可尋　藤成家 (5オ)

40 九月尽日遊東山詠惜秋和歌付小序　学生菅原在良

41 詠花駭定心和歌并序　素意

42 三月五日大伴宿祢池主万葉雑題序

43 悲歎俗道仮合離易去難留詩一首并序　山上憶良

44 挽歌序　筑前守山上臣憶良

45 和梅花歌　吉田連宜

46 敬喩(駭)史生尾張少作(唯)歌一首并短歌 (5ウ)

47 越前国大掾大伴宿祢池主来贈戯歌四首

48 更来贈歌二首

49 発心和歌序

対策文一条

50 詳和歌　従四位下行和歌博士紀朝臣貫成問　弾正大弼明賢也

51 恒対大江広房、匡房卿佐与(作)(憲)　和歌得業生従七位上行志摩目花園朝臣赤

52 雲居寺聖人懺狂言綺語和歌序 (6オ)

53 柿下朝臣人麻呂画讃一首并序　総計五十三篇 (6ウ)

本朝小序集

1 冬日侍宸宴言志和歌

参議正三位行右大弁兼侍従美濃(作)権守藤原朝臣行成上

長保寛弘之間、四海静謐、天下無事。聖上乗万機之餘閑、命一日之密宴。排月殿而展瓊筵、課天厨而羞綺饌。和其羹之者、慕塩梅於傅巌之風、陪其膳之者、推親舅於戚里之塵。蓋移彼青陽野外之俗事、供此 (7オ)
玄冬洞裏之仙遊矣。爰左丞相予蒙勅命、侍于座右。盃酌頻巡、絃管遍奏。陶酔如泥之中、無忘礼敬、雅音遏雲之（□、□□□□□）。于時、内大臣攀仙籬菊花之霜、

挾丞相之首、右衛門督藤原朝臣酌堯樽桑葉之露、勧丞相之傍。彼則標千万齢之寿、以称人望矣、是亦献卅一字之詞、以命叡情矣。小臣昔叨俗骨、謬列夕拝之仙郎、今忘庸才、愁接朝議之群俊。待唤陪謚、（7ウ）（□　□）。

陣座

2　早春子日詠和歌并序　左中弁江匡房

建寅之月、甲子之朝。蓬壺侍臣、合宴於林池之間焉。引松樹而論齢、則暁煙満□（於）綺羅之袖、酌華樽而勧酔、亦春霞薫於鸚鵡之盃。誰謂野外之故事、便是洞中之秘遊者也。志之所之、不能不詠。其詞曰。

殿上

3　夏夜詠連夜待郭公和歌一首并序（8オ）　蔵人左衛門小尉（少）有俊

時也、世属華夷之無為、節当梅夏之有閏。是以、殿上侍臣、七八許輩。乗禁腋之仮景、待郭公以諷吟。待非一夕、思好語於山路之雲、期是幾時、訝嬌音於宮庭之月者也。請抽柿本之秘思、将為蓬壺之美談。其詞云。

直廬

4　九日於左金吾藤次将青囲直廬詠秋情在菊和歌各加小序　賀州司馬実兼（8ウ）

斯日也、左金吾藤次将排直廬展宴席、招親知発諷吟。蓋当青宮之暇景、賞素商之令節也。爰以秋情在菊、為和歌題目矣。如予者、雖携風月情、猶拙習俗。牽興之有餘、忘顔之惟厚。云爾。

5　春日於鳥羽院直廬詠松為久友和歌　藤宗兼

鳥羽勝境者、象外名区也。艶詞巧思輩、侍太上皇玉洞直廬者多焉。于時、閑望貞松、方為久友。期傾蓋而歓宴、結芳契於君子万年之詞、（9オ）対勁節而予遊、伴素交於仙鶴千齢之翅。請任習俗、各詠和歌。其詞云。

6　七言暮春於城南別業同賦仙家春未尽詩一首題中取韻、付小序　文章得業生藤原金（令）明

于時也、惜芳春之時暮、出城南而遊遨。水石之有幽奇、淵雲之所頌歎也。境近都門、往来未過一里之際、処如仙洞、煙霞猶残三春之光。放蕩之趣、去此何之。彼蘭亭会友之地、徒謝風俗之懸隔、桃林尋花之人、（9ウ）

還嫌二時代之早遷一歟。遂抽二秘思一、筆不二停滞一。云レ爾。

殿上遊覧

7　詠二落花一　明衡

時属二三春之有楽一也、誇二四海之無為一。於レ是、我党十餘輩、出二鳳掖一而閑遊、策二馬蹄一而歴覧。于レ時、芳景云闌、落花欲レ尽。餘葩飄颻、数行之紅霞脆、雑蕊乱漫、千重之雪天晴者也。請課二山辺之古風一、将レ詠二花下之新什一。其詞云。

8　春日於二左監門藤次将青囲直廬一詠二百首和歌一序　（10オ）

黒主玄孫赤丸実兼也

近世歌仙之輩、各有二百首之和歌一。或謂レ継二柿本之餘風一、或謂レ伝二山辺之遺塵一。蓋斯道之再昌也。爰左監門藤次将属二暇日一相戯云。見レ賢思レ斉、雖レ愚所レ羨也。我等試欲下定二才（寸）陰於半日之程一、継中六義於百篇之跡上。敢不レ顧二後日之嘲一、只為レ催二遇境之興一也。已出言約、沈思忽成。未刻出レ題、秉レ燭終レ篇。聊走二短筆一、以記二大概一。于レ時長治第二之年、暮春之四日而已。（10ウ）

9　春日同詠二花樹久芳一応レ教倭歌一首并序　左（右）京権太夫藤原敦基

于レ時、三春半闌、四海無レ事。詩伯歌仙、十有餘輩。陪二大王之邸第一、属二為善之楽遊一也。更上二春臺之熙々一、旁望二花樹之漠々一。群粧競綻、餘艶久芳。紅匂之富二春風一也、宜レ伴二新松陵（凌）雲之齢一、玉蕊之薫二暁露一也、自叶二平砂為レ岩（巌）之頌一者歟。請下思二桃源一而献中三千年之寿上、将下慣二柿本一而詠中卅一字之詞上而已。（11オ）

親王家

10　秋夜陪二李部大王文亭一詠二臨レ暁聞レ鹿（虫）和歌一首付二小序一　菅在良

初秋十有餘日。吏部大王、忽排二脩竹之亭子一、方引二声華之門賓一。是以、詩情歌思之客、応二嘉招一之者有レ限。或陪二松容一而楽レ為レ善、或抽二藻思一而詠二和歌一。其時也、夜臨二素暁一、虫報二清音一。占二孀閨一而幽吟、思婦之夢易レ驚、就二孤叢一而疑レ織、遊子之涙難レ禁之也。既而西園宴闌、東山天曙。謬接二三諫之座一、猥述二六義之詞一而已。其詞曰。（11ウ）

后宮宴

11　早春陪二長秋宮一　藤広業（羊）

寛仁第五年、正月初三日。関白及郡卿、参二長秋宮一、致二賀礼一矣。杖レ酔乗レ興、各相語曰、不レ憚二紅顔一、已近二翠簾一。只献二千秋万歳之詞一、始陳二飽恩浴徳之志一而已。（12オ）

12

暮秋詠二終日翫レ菊和歌并序　左衛門少尉藤原有俊

康平七年、涼秋九月。雲霄之客、十有餘輩。方属二諸夏之静謐一、勿陪二長秋之宮囲一矣。蓋当二蕭辰之欲レ暮、翫二菊花之纔残一也。鵷鸞移レ座、争二艶色於錦袖之粧一、窈窕隔レ簾、添二濃香於玉鑪之気一。優遊之趣、終日翫レ菊也。爰有二左金吾校尉藤原有俊之者一。性少二風月才一、詞迷二卅一字一。謬列二蓬壺之英華一、猥詠二椒庭之仙草一而已。其詞曰。(12ウ)

内親王家

13

早春子日陪二於野宮一詠レ松和歌一首　前文章得業生菅在良

承保第二之春、正月初七之日。日当二子日一、可二賞翫一者也。是以、敬神之餘、宮人数輩。於二東郊一以摘レ菜、偏祈二七曜之精霊一、登二津岡一以攀レ松、遙期二千年之遐算一。楽レ春之心、於レ是而足。請詠二双関一、各献二六義一。其詞曰。(13オ)

14

初冬庚申夜侍二野宮一翫二初雪一　尚書

夫野宮者、雍州葛県之勝境、伊州公主之書室也。対レ水背レ山、万歳千秋之勢、視聴惟新、松近柏老、風中霜後之貞、節操可レ慕。望二其戸牖一、紅葉灑落之雨声寒、至二其階庭一、青苔嬋娟之煙跡静。不レ知仙洞歟、且不レ知人間歟。于レ時(13ウ)

貞元々年、冬十月庚申夜。門賓二十許人、優二遊於其中一矣。或献二和漢歌之風詞一、蓋所二以幽二賛神明一也、或奏二絃管之雲曲一、蓋所二以感二動神明一也。酒是杜家之味、待二得嵇康玉山之頽一、膾亦松江之鱗、釣二出於左慈銅盤之狭一。希代之芳遊、寔不レ可二記尽一者也。方今、深漏水滴、初雪風軽。逼レ簾新飛、頭驚二一毛之鶴一、侵レ窓漸乱、心迷二三秋之蛍一。彼子猷山陰之遊、扣レ門興尽、孫康晋朝之学、照レ案影幽。後視レ今者、豈敢間然。当二于斯時一、珠簾之下、璅砌之前。趙女楚姫、思二氷紈之不レ勝而含レ心、瑤箏玉琴、忘二雪指之猶冷一而調レ曲。於戯、不レ容レ髪之感、為二責身之歓一而已。爰座客之末、有二一腐儒一。雖レ守二三尸一而夜艾、請レ祝二千載於寒松一。云レ爾。(14オ)

大臣家

15

夏日侍二東三条第一同詠二池上鶴一応レ教和歌一首并序　永久三ノ六月廿七日　左少弁実光(右)

夫東三条第者、累葉栄貴之甲地也。湛二方池於斯中一、伴二仙鶴於其上一。眠二沙月一而許レ交、若来二自蓬嶋一、若来二自茅洞一、舞二汀風一而献レ寿、亦不レ限二千秋一、亦不レ限二万春一者歟。於レ是、内相府尊閤。林鐘令辰、槐門仮日。新令三月卿雲(14ウ)

客之英豪、忽攄二周詩和語之藻思一。宴飲無レ算、筆硯有レ時。歓飫之餘、各相語曰。昔孝武帝之賢佐公孫弘、開二三館一而引二群才一、今博陸侯之長嫡内丞相、課二六義一而詠二仙算一。不レ足二嗟嘆一、聊述二大綱一。其詞曰。

16

秋遊

金風九月、天気太平也。公卿大夫之輩、侍座済々。酒盃頻廻、管絃屢調。于レ時、秋風之漸暮、旅雁高唳、暁月之正円、隠人夢驚。令日之興、後代美談者歟。

17

行旅

初夏同詠レ待二郭公忍声一和歌　大臣家〔作者可尋之〕祇候人也

初夏月之上旬、蓮府侍臣等。依二勤節之餘暇一、企吟詠之勝遊一。于レ時、郭公秘レ声、歌人蕩レ意。望二遠地一欲レ尋レ声、則群鳥之囀破レ聴、居二深窓一欲レ傾レ耳、又数盃之巡催レ眠。如レ予者、性不レ稟二於赤人一、意猶異二於黒主一。唯卅一字之詞、接二十餘輩之列一而已。其詞曰。

18

山家

五月五日詠二和歌一二首昌蒲祝付二小序一　阿波権守藤原兼衡

時也、左金吾源納言。当二仲夏端午之日一、会二山辺柿本之仙一焉。方今、盃爵無レ算、酉水之酒頻酌、更漏漸転、西霜之山欲レ明。請二題節物一、各詠二菖蒲一。情感之餘、遂添二祝思一而已。其詞曰。

19

夏日於二三品将作大匠水閣一同詠二水風晩来一和歌一首并序　元永六（元）—六月十六日　大学頭敦光

我朝風俗、倭歌為レ本。生二於志一、形二於言一。紀二一事一、詠二一物一。誠為二諷諭之端一、長著二君臣之美一。是以、将作大匠。毎レ属二覲天之餘閑一、凝二詞露於六儀一。叶二賞心一者、花鳥草虫之逸興、応二嘉招一者、香衫細男（馬）之群英。今日会遇、亦是一揆。方今、流水当レ夏兮冷、涼風迎レ晩兮来。芦葉戦以凄々、波烟漸暗、松標動以颯々、沙月初明。情感不レ尽、聊以詠歌。其詞曰。

20

夏日於二右武衛将軍小坪別業一詠二池水久澄一和歌付二小序一　式部小（少）丞菅原在良

山下有レ池、々間有レ水。恣二其風流之勝一者、蓋右武衛将軍別業也。是以、清華雲客、五六許輩。更随二仁智之所レ好、共伴二登臨之交遊一。中有二李部郎中菅在良一。誤以二池水久澄一、為二和歌題目一而已。

21

秋日詠二二首和歌一　凌露尋レ花　田家秋風　兼衡

于レ時秋也。華字名族、緇素数輩。会二于下州前刺史之風亭一矣。蓋賞二景物一也。至二彼拝迎之礼早備、談話之態相催。旨酒頻勧、中山下若之味湛レ罇、奇菓是好、南安北邦之珍満ヲ盤。〇集之趣、誰敢間然。況亦凌二暁露之瀼々一、尋二野花一而乗レ興、感二秋風之颯々一、卜二田家一而忘レ帰者也。請抽二六義之秘思一、各詠二一首之和歌一。其詞曰。

22　於二源亜将亭一詠二月前擣衣一　親長

源亜将者、堯川之餘滴也。仰二其名誉一、則嵇山之松慙レ色、論二其才藝一、亦陸海之波譲レ声。於レ是、招二詞苑之朋友一、排二文亭一而宴遊。蓋感二此月前之擣衣一、効二彼柿下之遺跡一也。賓鴈混レ声、遙漢雲霧之後、孀婦添レ怨、荒庭雪寒之時。既而依二盃酌之無ヲ算、和二気味之有ヲ由。中有二一沈水生一。雖レ少二興于染ヲ筆、已無二心于帰ヲ家。云レ爾。

23　冬夜守二庚申一詠二夜聞一松風一和歌　少内記藤敦基

倭歌者、我朝之勝事也。雖二彼天神海童、感二其業於上古一。況於二都人士女、貽二其詞於方来一。是以、煙霞之客、四五許輩。新展二燕席一、共命二予遊一。伝二李氏之昔塵一、以守二三彭一、聞二松樹之夜風一、以成二一詠一。云レ爾。

24　暮春於二双輪寺一聴レ講二法華経一詠レ経二行林中一和歌并序　兼衡

嘉保二年、姑洗六日。門下録事及尚書都事等、十有餘輩。暫属二蘭省之休暇一、忽尋二蕭寺一而交会。蓋講二一乗一而顕二権実之理一、課二六義一而抽二和漢之懐一也。方今聞二此法華一者、或仏子厭二世上一以修練、卜二林中一以経行。春花綻レ霞之朝、心無レ染二餘香一、秋葉随レ嵐之夕、眼不レ耽二異綵一。偏唯遠二離俗塵一、勤二求仏道一者也。既而講演之儀方畢、讃嘆之興漸酣。中有二才藝猶浅、煩悩未レ除之者一。専二念仏之懇誠一、顧二落日一而雖二閑坐一、思二奉公之至節一、策二遺風一而欲二早帰一。聊記二当時之大概一、将レ為二来世之芳縁一。其詞曰。

25　極楽和歌序　明衡非二明衡筆一歟、不審

夫和歌者、遊心述懐之根源也。見レ事聞レ事、哀楽相変。山水風月、為レ楽之者、以レ之散レ憤、飛花落葉、含レ哀之者、以レ之発レ懐者也。思慮廻二於臆中一、吟詠形二於言外一。凡厥哀慟之砌、讌遊之処。誰不レ談二六義一、誰不レ披二歌集一。寔咲二鬼神一、和二夫婦一。只以二和歌一為二其規模一耳。但興二春花一翫二秋月一、併如二風前之雲一、観二我身一量二人語一、悉以二水上之沫一。見二鸞鏡変レ昨之影一者、則悲二壮年之従過一、聞二鳧鐘

告レ暁之声一者、人(又)悔二一日之空斜一。観二無常遷移之形一、真如境界、自眼前縁レ之、想二如幻如化之像一、無相妙理、已心中悟レ之。可レ厭者慣丙(命)之塵、可レ欣者常寂之刹。嗟呼、古柿本人丸山辺赤人、尚迷二三界之火宅仰レ花中一、凡河内躬恒紀貫之、唯誇二一旦之歌席傾レ盞都一。往古来今、艶人歌仙。皆以レ之為二花鳥之伴一、多以レ之為二仮生之謀一。嘗寄レ興以願二往生一、唱レ詠以嘆二仏徳一之輩希者歟。彼奈落迦中、唯有二号泣之声一、全無二鷙鷙之囀一。飢饉城内、永失二冷水之流一、鎮得二鉄湯之進一。聞レ之興宴可レ休、思レ之魂魄将レ消。今聞西方有二仏土一。仏号二弥陀一、国名二極楽一。七宝楼閣交レ色、至レ之盍レ生二歓喜一焉、四徳風声満レ耳、会レ之豈不二詠吟一哉。八功徳池之浪蒼々、浴者方至二不退転一、七重宝林之嵐索々、触者自諧二無生忍一。衆鳥讃仏之音哀和、誠可レ嘲二於娑婆之春鶯一。黄金瑠璃之地浄妙、又奈ニ何於穢土之秋野一。是以、林花綻レ霞之朝、思二安(養)巻衣裓之供花一而合掌、嶺月出レ霧之夕、観二弥陀烏瑟之満月一而低頭。至心無二一、欣求在レ此。折二四照之華一、遙向二十万億土之幽境一、挑二三明之燈一、方待二三十二相之来迎一。五塵六欲、皆悲二北邙一、難レ免而沈吟、三(業)拝四儀、悉寄二西方一、易レ往而成レ興。然則以二此三十一字之綺語一、讃二彼四十八願の依正一。蓋楞厳院往生集、銘レ心染レ肝。且拠二彼文一仮二章句一、次第詠レ之而已。謹序。

(20ウ)
(21オ)
(21ウ)

仏事

26　秋日於二嵯峨別墅一詠二山家秋雨一和歌一首付二小序一

学生藤原行家

五年秋八月候、我党五六許輩。属二寰海之静謐一、翫二嵯峨之勝形一。時也、行路迢々、楽心允々。蘭蕙露底、瀝二詞露一而優遊、芦萩(荻)風前、動二思風一而悵望。情感之至、不レ可レ勝レ計者歟。昨製二詩篇一、責二虚無於野径之晩花一、今(令)詠二和歌一、叩二寂寞於山家之秋雨一。其詞曰。

(22オ)

まろうすけしけれるやとに秋ふかみやまのはよりそ雨もふりける

ときわかすいつものとけきやまさとのさひしさそふるあきの雨かな

やまさとに秋のひくらしふる雨は軒のしつくにかそへられける

慶賀

27　贈答　明衡

(22ウ)

予従二春宮一乎拝二雲州一、蓋有二朝恩抽二夜学一也。爰当二三月

之候、催五馬之行。林花薫行粧、流鶯唱離歌。羈旅之思、諳(暗)然銷魂。于時、加賀員外刺史。随李老之玄訓、以贈言、吐花鳥之英詞、以惜〇(別)。志之所之、聊以和答

(23オ)

28

早夏諸客賀予再兼翰林、不堪情感、聊〇(賦)一絶、付小序

吏部員外侍郎大江匡衡

予今年、正月拝尾州刺史、三月兼翰林主人。蓋聖主好文、賢相重士之所致也。於是、賀州源刺史青宮菅学士、枉華軒、与門生四五輩来賀。恩之深也、聊以盃酌、答謝厚意。昔山陰曲水之会、右軍自作序自書、今洛陽翰林之亭、主人亦自記事自詠。其詞曰。

(23ウ)

(24オ)

仏経供養和歌序　藤後生

夫昔自一(橋)楊之下、乾坤定陰陽之義、八嶋之上、山川分□(峙)流之義事見日本紀。神明所感、猶寄詞於歌詠、精誠所応、莫不資其謳吟。所以上古皇帝、奉賀宝算、尚以和歌、当代聖皇、祈禱長生、蓋(盍)遂(遂)旧風矣。仍聊奉献和歌四首、以述僧等懐志焉。和頌曰。栄祐以講作也

女院御八講之次和歌序　斉信郷(卿)

一乗八講之筵已巻。四七妙文、春花早発、五六宝算、秋月

(24ウ)(八)

29

久廻。当于此時、在座陪臣、垂感涙曰、不図今日復見寛平旧儀矣。于時長月也。故賦秋情而已。

きみかよにいまいくたひかかくしつゝうれしき事に逢んとすらむ

30

山寺

暮春於円融院詠落花満船和歌付小序　源時綱

(25オ)

31

是日也、我党数四、載(轄)乾載脂、到于円融之仙窟矣。院中有水、々上有船。傍岸有樹、繞□(樹)有花。開兮臨水上、落兮満船中。積雑蘂而容与、宛如三春之色、戴重葩而沂(泝)沿、空奪一葉之名。憑彼狂風之繖緑、莫使軽波以覆濃粧而已。請課和歌各叙思。其詞曰。

ちる花のつもれる船はゆくはるをさしとゝめたるこゝちこそすれ

(25ウ)

32

暮春遊長楽寺同詠花満遠近和歌付小序　散班高階公俊

治暦二年、暮春五日。緇素之好事、花鳥在心。煙霞随手之者、五六許輩。属海内之静謐、出洛外而交遊。蓋賞天時之可賞、尋地形之可尋也。于時、花満遠近、匂

遍二高低一。素葩埋レ庭之粧、眼迷二三冬之雪一、紅艶連レ嶺之色、望通二四山之霞一者歟。慙レ非二黒主之詞一、猥述二赤人之思一而已。(26オ)

33

春日於二行願寺一同詠二見レ花日暮一和歌一首并序　泗

水沈老安祐

聖暦六年之候、仲春二月之天。巧二倭歌一之者、緇素十有餘輩、不レ期而会合。蕭寺字欽(一字歟)、富二花樹一、地隔二俗塵一之故也。蓋属二海内之無為一、楽二花間之遊宴一也。自然之感、遇レ境兮知而已。禅侶則伝二華山之前跡一、俗客亦称二柿下之末枝一者歟。于レ時、見レ花日暮、乗レ興帰忘。濃艶養レ望、烏輪転不レ駐、素葩労レ眼、萍実傾已沈。請レ課二卅一字之篇什一、将レ約二千万歳之歓遊一。其詞曰。(26ウ)

35

夏日同詠二松陰避レ暑和歌　宗孝言

八年之夏、五月之候。苦二炎熱一兮尋二古寺一、得二古寺一兮遇二老松一。蓋亭々而清涼、欝々而蕭索。可レ追二涼其下一、堪レ避二暑其陰一。於戯、百尺煙蓋之風、消二玉汗兮三伏之天一、千年翠葉之露、徧二葛衿於三秋之暁一者也。請課二松陰之新情一、将レ抽二柿下之古思一。其詞曰。

夏日於二雲居寺一同詠二雨中逢レ友和歌付二小序一　甲(27オ)

34

斐権守有業

交芳二於蘭一、契堅二於石一之者、七八許輩。凌二雨脚之滂流一、尋二雲居之幽寺一。蓋訪二上人寂寞一也。所レ談者空仮中之妙理矣、□□自消、所レ礼者安養界之厳飾焉、眼塵忽洗。凡視聴之所レ触、莫不レ滅二罪霜一矣。随喜之餘、聊入二風情一。題目々(日)、雨中逢レ友、即是斯時也。願以二此六義之興一、翻為二彼九品之縁一。其詞曰。

36

早秋於二清水寺西洞一詠二望月未レ飽和歌一首并序(27ウ)

大江有元

聖暦改元之歳、孟秋云来之天。性好二風月一、思染二煙霞一之者。六七許人、暫辞二華洛十二之衢一、忽尋二蕭寺幽深之地一。始則臨二鴨水一而渡二白浪一、後亦礼二仏閣一而藉二青苔一。蓋属二四海之康寧一、述二六義之雅頌一也。或占二樹陰一而命レ飲、或逐二柿下一而形レ言。勝遊之趣、誠有レ以哉。于レ時、終宵忘レ眠、望月未レ飽。蒼々重蒼々、誰厭二清光之対レ雪。皎々又皎々、独翫二素影之敷レ氷一者也。如レ予者、蓬鬢半悴、蕪詞漸慵。顧二暮齢於潘岳一、既作二二年之兄一、比二風情於小町一、猶隔二万里之跡一。愁接二一両輩之佳客一、猥詠二卅一字之和歌一。其詞曰。(28オ)

37

九月十三夜於二長楽寺一詠二山家秋月一和歌一首加二小序一

学生大江有元

九月十三夜者、好レ事翫レ月之佳期也。風煙其志之輩、都慮(虞)両三。辞二子城之塵囂一、来二東山之蘭若一矣。于レ時、磎門秋暮、山家月明。其光晃朗、賓鴈叫而雲晴、其影蒼茫、孤鶴警而露冷者也。逸興之餘、遂詠二和歌一。其詞曰。

いつとてもこゝろにかくる秋のよの月は山里めてたかりけり (28ウ)

38

秋夜宿二山寺一言レ志和歌一首付二小序一

肥州前吏藤友房

于レ時秋也、蘭友十有餘輩。暫出二洛城之囂塵一、忽宿二山寺之勝境一。爰池水澄兮満レ科、林葉落兮敷レ地。可二以洗二俗客之眼一、可二以成二禅侶之観一。幽情難レ繁、忘二帰去一而通レ夜、餘興弥催、翫二景気一而達レ朝。請以二動中之志一、聊詠二形外之詞一。其詞曰。

39

題可レ尋　正集和歌序題(ニトス)

藤成家

広隆寺中、紅葉林下。数輩樣客、相共優遊。于レ時、索々兮零落、仙雪飄二於初冬之風一、紛々兮散乱、浮雲映二於夕陽之影一。縦念二十二願之本誓一、盍レ成二卅一字之新吟一。情感之至、欲レ罷不レ能。其詞曰。 (29ウ)

40

九月尽日遊二東山一詠レ惜レ秋和歌一首付二小序一

学生菅原在良

九月尽者、古人今人相惜之候也。是以、戸部郎、才類二江左一、詞伝二山辺一之者七八許輩。連二華軒一而出二重城一、所レ過者碧水湛々、携二蘭友一而到二禅門一、所レ翫者紅葉紛々。蓋惜二三秋之云暮一、弥思二一日之将レ闌者歟。謬以二詩家之後胤一、猥接二歌筵之末座一而已。

41

詠二花駭一定心一和歌并序

素意藤重経 (30オ)

永保三年、三月十三日。花漠々鳥関々矣。五六輩出レ自二草庵一、徘徊二樹下一。于レ時、名香之烟混二紅霞一、行道之跡踏二白雲一。落日已迫二西崦一、片月漸明二南軒一。情感間動、不レ能黙止。以二花駭一定心一為二題目一、各述二其思一。詞云。

42

万葉雑題序

三月五日大伴宿祢池主

昨暮来使、幸也以乗(垂)二暁(晩)春遊覧之詩一、今朝累レ信、辱也以貺二相招望野之歌一。一看二玉藻一、稍写二欝行(結)一、二吟二秀句一、已蠲二愁緒一。非二此眺翫一、孰能暢レ心乎。但惟下僕、稟経(性)難レ

43

彫、闇神靡レ瑩。握レ翰腐レ毫、対レ研忘レ濁。(渇)(ママ)(終)(日)渇 絡曰(目)自流、綴レ之不レ能。所謂文章天骨、習レ之不レ得也。豈堪ニ探レ字勒レ韻、叶ニ和雅篇一哉。抑聞ニ鄙里小児一、古人言(無)天レ不レ酬。聊裁ニ拙詠一、敬擬ニ〇(辞)詞一矣。抑小児譬濫謡、敬写ニ(葉)薬端一、式擬レ乱曰。

悲ニ歎俗道仮合□(即)離易レ去難レ留詩一首并序　山上憶良

(31オ)

竊以、釈慈之示教、先開ニ三帰五戒一而紀(化)ニ法界一、周孔之垂訓、前張ニ三綱五教一以済ニ郡(邦)国一。故知、引導雖レ二、得レ悟惟一也。但以世無ニ恒質一、所以陵谷更変、人無ニ定期一、所以寿夭不レ同。撃目之間、百齢已尽、□(交又作申)臂之頃、千代亦空。旦作ニ席上之主一、夕為ニ泉下之客一。白馬走来、黄泉何及。隴上青松空懸ニ信剣一、野中白楊但吹ニ悲風一。是知、世俗本無ニ隠遁之室一、原野唯有ニ長夜之臺一。先聖已去、後賢不レ留。(如モシ)必有ニ贖而可レ免者、古人誰無ニ価金一乎。未レ聞下独存遂見ニ世終一者上。所以維摩大士疾ニ玉体乎方丈一、釈迦能仁掩ニ金容于双樹一。内教(曰)曰、不レ欲ニ黒闇之後来一、莫レ入ニ徳天之先至一。故知、生必有レ死、々若不レ欲、不レ(如)知不レ生。況乎縦覚ニ始終之恒数一、何(慮)慮ニ存亡之大期一者也。俗道変化猶ニ撃

(31ウ)

44

挽歌序　筑前守山上臣憶良

(32オ)

(32ウ)

蓋聞、四生起滅、方ニ夢皆空一、三界漂流、喩ニ環不レ息一。所以維摩大士在ニ乎方丈一、有レ懐ニ染疾之患一、釈迦能仁坐ニ於双林一、無レ免ニ泥洹之苦一。故知、二聖至極、不レ能レ払ニ力負之尋至一、三千世界、誰能逃ニ黒闇之捜来一。二鼠競走而度レ目之鳥旦飛、四蛇争侵而過レ隙之駒夕走。嗟乎、痛哉。紅顔共ニ三従一長滅逝、素質與ニ四(衍字)徳一永滅。何図、偕老違ニ於要期一、独飛生ニ於半路一。蘭室屏風徒張、断腸之哀弥痛、枕頭明鏡空懸、染筠之涙逾落。泉門一掩、無レ由ニ再見一、嗚呼哀哉、愛河波浪已先滅、苦海煩悩亦无レ結、従来厭ニ離此穢土一、本願託ニ生彼浄刹一。　神亀五年七月廿一日

(33オ)

45

和ニ梅花歌一　吉田連宜

宜啓、伏奉ニ四月六日賜書一。跪開ニ報函一、拝ニ読芳藻一。心神開朗、似レ懐ニ泰初之月一、鄙懐除祛、若レ披ニ楽広之天一。至レ若下羈ニ旅辺城一、懐ニ古旧一而傷レ志、年矢不レ停、憶ニ(平)乎生一而落レ涙。但達人安レ排、君子無レ悶。伏冀、朝宣ニ懐レ翟之化一、暮存ニ(放)教レ亀之術一。架ニ張趙於百代一、追ニ松喬於千齢一耳。

(33ウ)

兼奉二垂示一、梅花芳席、群英摘レ藻、松浦玉潭、仙媛贈答。類レ杏壇各言之作一、疑二衡皐税駕之篇一。耽読吟諷、感(感)謝歓招(招)。宜恋レ主之誠、々逾二犬馬一、仰レ徳之心、々同二葵藿一。而碧海分レ地、白雲隔レ天。徒積二傾延一、何慰二労緒一。蓋秋膺レ節(孟)。伏冀、万祐日新。今因二相撲部領使一、謹付二片紙一。宜謹啓。不次。

(34オ)

46

敬(教)喩史生尾張少作(咋)歌一首并短(歌)

七出例云、但犯二一条一、即合レ弃レ之、無二七出一輒弃者、徒一年半。三不去云、雖レ犯二七出一、不レ合レ弃レ之、違者杖一百、唯犯姧悪疾得(弃)(□)之。両妻例云、有レ妻更娶者、徒一年、女家杖一百離レ之。詔書云、愍二賜義夫節婦一。謹安、件数条、建レ法之基、化レ道之源也。然則義史(夫)之道、情存レ無レ別、一家同レ財。豈有二忘レ旧愛一新之志一乎哉。所以綴二作数行之歌一、令レ悔二棄悪惑(旧之)一。其詞曰。

(34ウ)

47

越前国大掾大伴宿祢池主来贈戯歌四首

忽辱二恩賜一、驚欣已深。心中含レ笑、独座稍開、表裏不レ同、相違何異。推二量所レ由、率爾作レ栄(策)歟。明知加レ言、豈有二他意一乎。凡鴛(賈)二易本物一、其罪不レ軽。正贓(倍)(□□)(贓)、宜二急并満一、令(今)勒二風雲一、発二遣微(徴)使一。早速返報、不レ須二延廻一。　勝宝元年十一月十二日。物所二貨(賈)易一下吏。謹訴二鴛(賈)易人断官司庁下一。

(35オ)

48

更来贈歌二首

依レ迎二駅使一事、今月五日、到二来部下加賀郡境一。面蔭見二射水之郷一、恋緒結二深海之村一。身異二胡馬一、心悲二北風一。乗レ月徘徊、曽無二所レ為一。稍開二来対一、其辞云(封)〇(云)者、光(先)所レ奉書、返畏夜(度)疑歟。僕作二嚶(嘤)嬲(羅)嬲一、且悩二使君一。夫乞レ水得レ酒、従来能口。論レ時合レ理、何題二強吏一乎。尋誦二針袋詠一、詞泉酌不レ渇(竭)。抱レ膝独咲、能蠲二旅愁一。陶然遣レ日、何慮何思。短筆不宣。　勝宝元年十二月十五日、(徴)物下司。謹上、不伏使君(徒記室)

(35ウ)

49

発心和歌序

妾久係二念於仏陀一、常寄二情於法宝一。為二菩提一也。釈尊説二法華一乗、載歌二詠如来之善一。爰知、歌詠之詞、苟為二仏事一矣。然猶梵語者天竺之詞、流沙遙隔、漢字者震旦之跡、風俗名殊(各)。弟子詫(誕)二生皇朝一、愛(受)身婦女。不レ兼二邯鄲之歩、偏染二桑樺(梓)之情一。是故、素戔之新詠卅一字歌、学而以述二其義一、肥人之始卅(卌)八字摂(様)、習而以書二其詞一。始レ自二四弘願一、洎二于十大願一。惣五十五首、勒為二一巻一。名曰二発心集一。是

(36オ)

則所以、十方浄土之際、遍発二往生之心一、九品蓮臺之上、終植二化生之縁一也。何必傾二（□）力一以営二堂塔一、教主愍二誓願之誠一、何必剃二鬢髮一（36ウ）以入二山林一、経五彰二讃歎之徳一。（王）耶不（那）レ知二此和歌之道一、彼阿字之門矣。唯願、若有二見聞者、生々世々、与レ妾値遇、同二多宝如来之願一、定有二誹謗者、在々所々、与レ妾結縁、同二不軽菩薩之行一。一心至レ実、三宝捨レ諸。嗟乎、秋風吹レ林之声、是告レ老也、晩日銜レ山之景、非二俄令一（命）哉。泣思二臨終一、手執二此集一。于レ時、寛弘九載南呂也。

対策文一条（37オ）

50

詳二和歌一　従四位下行和歌博士紀朝臣貫成問　弾正大弼明賢也

問。夫和歌者、志之所レ之也。心動二於中一、言形二於外一。是以、春花○（開）朝、争二濃艶一而賞翫、秋月朗夕、望二清光一而詠吟。誠是、日域之風雅、人倫之師友者也。不レ審、野相公告レ別矣、為レ西為レ東、在中将歎レ老焉、対レ月対レ日。混本昔製、未レ知二其情一、誹諧古辞、是聞二其訓一。又臨二難波津一之什、献二何主一、至二富緒川一之篇、報二誰人一。子性稟二柿下一、累葉之風久扇、学志二山辺一、詞峯之月高晴。宜レ課二七

51

歩（□）（之）才名、莫レ迷二六義之応対一。

和歌得業生従七位上行志摩目花園朝臣赤恒対　大江匡房卿作（与）

対。竊以、素戔烏尊之致二出雲国一、望二仙妃（姫）一而始作二三十一字之詠一、清御原朝之遊二吉野宮一、訪二洛媛一而忽贈二五七々句之詞一。夫和歌之起、自レ古而爾矣。尋二淵源於気岸一、艶流涌二神世之間一、拾二華実於性圃一、濃香絶（施）二俗塵之中一。天孫者藩城之君也、煙客命二松客（容）一而形レ言、海童者潮汐之女也、騒人瀝二藻思一而消レ魂。曲水初三之日、酌二羽爵一而叩レ疑、斜漢第七之秋、代二織女一而惜レ別。非レ詩非レ賦、只凝二習俗之風情一、分レ賢分レ愚、誠是諳（諳）人之露胆。遂使下皐蒲腐而水蛍流、尽入二幽玄之輿一、宮樹紅而小（山）蟬鳴、高振二神妙之理一。風雲草木之非レ一、課二六義一而編次、哀楽怨別之区分、労二寸心一而裁成。燕寝夜長、滲二清冷於寒砧之韻一、野寺日暮、動二遠情於嶺鐘之声一。征夫遊子之不二我土一、寄二旅鴈一而馳レ思、蘭棹桂檝之恋二故郷一、付二（微）徽波一而通レ詞。然則小野宰相告レ別矣、掛二片帆於北海之波一、在原中将歎レ老焉、欹二孤枕於西楼之月一。難波津之什、献二大鷦鷯之天皇一、富緒川之篇、報二豊厩戸之太子一。混本昔製、紀二風土一而易レ覚、誹諧古辞、注（訪）二日域一而猶詳。我后徳被二上下一、感生二視聴一。南

薫風馥、春日野之草靡、北共(拱)星晴、天磐門之霧高褰。千代八千代、平砂長而期二苔蒸之巌一、万歳復万歳、飛塵積而成二雲懸之山一矣。謹対。(39オ)

52

雲居寺聖人懺二狂言綺語一和歌序

和歌之興、其風遠哉。陰陽定レ義、山川分レ形以降、神明所レ感、歌詠有レ由。所以住吉明神、為二諷喩一垂レ跡、後代詞人、慣二微言一継レ塵。倩尋二此明神之本地一、寧非二高貴徳王菩薩一哉、追訪二此菩薩之対揚一、則是双林捃拾之説教也。経二演麁言及軽語一、皆帰二第一義之文一。誠哉此言。予止観之餘、坐禅之隙、時々有二和歌之口号一。春朝戯指レ花称レ雲、秋夕哢仮レ月云レ雪。妄言之咎難レ避、綺語之過何為。仍図二彼菩薩之像一、写二此経典之文一。向レ像講レ経、礼レ経謝レ罪。請以二一生中之狂言一、翻為二三菩提之因縁一而已。　嘉承元年九月十三日夜講之。藤原基俊作。(39ウ)

53

柿下朝臣人麻呂画讃一首并序(40オ)

大夫姓柿下、名人麻呂。蓋上世之歌人也。仕二持統文武之聖朝一、遇二新田高市之皇子一。吉野山之春風、従二仙駕一而献レ寿、明石浦之秋霧、思二扁舟一而瀝レ詞。誠是、六義之秀逸、万代之美談者歟。方今、為レ□(亀)二幽玄之古篇一、聊伝二後素之新様一。因レ有レ所レ感、乃作レ讃焉。其詞曰。

和歌之仙　稟二性于天一　其才卓爾
其鋒森然　三十一字　詞華露鮮(40ウ)
四百餘載　来葉風伝　斯道宗匠
我朝先賢　涅而無レ緇　鑽レ之弥堅
鳳毛少レ彙　麟角猶専　既謂二独歩一
誰敢比肩

作者大学頭敦光朝臣(41オ)(41ウ)

奥書

従二白川殿一所二申出一之和歌序六巻之外、更有二一巻(外題云和歌序等)一令レ任二彼御本一続立レ此巻上了、右一本元出二於冷泉家一、外題為家卿手蹟也云々。(42オ)

〔冬日侍二宸宴一言レ志和歌同紙同筆之類暁月之御筆。

九日於二左金吾藤次将青闕(ママ)直廬一詠二秋情在レ菊和歌同紙同筆之類為秀卿之御筆也。(42ウ)

寛文丁未　冷泉為清　（花押）〕(43オ)